掲載日:2024年10月17日，紙名:朝刊，面名:特集１，020頁，記事ID:KIJ20241017_A0020000101E42001
(C)沖縄タイムス社

地道な活動 地域に光

贈呈式 20日タイムスホール

地域に根差した活動で社会に貢献している個人・団体・企業を顕彰する「第17回タイムス地域貢献賞」の受賞者が決まった。長年にわたり、地域活性化や社会福祉などに取り組む２個人３団体・企業が選ばれた。今回を含め贈賞は82個人・団体となった。それぞれの取り組みを紹介する。

贈呈式は20日午後２時から、那覇市のタイムスホールで開催する。問い合わせは沖縄タイムス社事業局文化事業部、電話098(860)3588（午前10時～午後５時、平日のみ）。

学校の美化活動39年

宜野座小学校の環境美化活動を39年間ボランティアで続ける安次嶺近榮さん＝11日、同校

安次嶺近榮さん（83）＝宜野座村

39年間、宜野座小学校の環境美化活動をボランティアで続けている。学校周辺のサンダンカやクロトンなどの枝葉を剪定したり、花壇の雑草を取り除いたりして植栽管理に汗を流す。「3度の食事の次に掃除が好き。自由にやらせていただき感謝しています」と週4回、自宅から徒歩1分の同校に通って約2時間作業に励む。

きっかけは家の前のごみ拾いからで、その後、学校まで手を広げた。約15種類の草木を植樹し、10年前に植えた約50㌢のフクギは3㍍まで伸びた。「子どもたちの元気なあいさつや木の成長がうれしくて、それが原動力」と笑顔を見せる。

沖縄戦時、北谷町下勢頭から宜野座村福山に家族で一時疎開した。当時4歳で記憶はない。戦後、実家は米軍に接収され、現在は嘉手納基地の中にある。44歳の時に、宜野座村の姉の家を増築し、2階に居を構えた。「戦時中、生活のために福山の木をたくさん切り倒したと聞かされた。おわびの気持ちもあって木を植えている」と話す。

同小の新城雄一郎校長は「お体に気を付けて、これからもよろしくお願いします」と感謝の気持ちを込めた。

（北部報道部・下地広也）

女子野球普及に尽力

女子野球の普及強化に奔走する仲本裕樹さん（前列中央）と、代表を務める女子選抜「沖縄ガールズ」の選手たち＝12日、宜野湾市民広場野球場

県野球連盟女子部長 仲本裕樹さん（46）＝南城市

好きな野球を続けられる環境をつくりたい―。仲本裕樹さん（46）は年齢を重ねるたびに競技する場が少なくなる女子野球の環境整備に奔走してきた。

県野球連盟女子部長を務め、小、中学生の選抜チーム「沖縄ガールズ」の代表。県内唯一の女子硬式野球部がある南部商業高校を支援しようと、今年4月には仲間と私費を投じて野球部専用の寮を整備した。

平日は県内各地のバッティングセンターでスイングや遠投などの技術指導に当たる。女子野球との関わりは2012年ごろ。野球人口が減り始めた一方、女子選手の増加が目に留まった。

ただ中学、高校と進むにつれほとんどが野球を辞め、一部選手は硬式野球部がある県外の高校に進学するしか選択肢がなかった。

試合機会を提供しようと学童野球や中学部活に所属する女子選手に声をかけ、沖縄ガールズを創設。北は国頭3村、南は石垣島から選手が集まり九州、全国大会に挑む。21年創部の南部商業の女子硬式野球部もバックアップ。ガールズ出身者が進学するなど、小中高校と競技を続ける環境が整った。「沖縄の女子チームが全国の頂点に立つのが目標」と子どもたちと共に大きな夢を掲げる。

（南部報道部・新崎哲史）

事故防ぐ着衣泳 周知

手と足を広げて体を水中に沈め、顔を水面から出す「浮いて待て」の姿勢を教える仲村翔代表（中央）＝6月3日、那覇市・城東小

一般社団法人UITEMATE沖縄 ＝宜野湾市

「救助が来るまで浮いて待て」。体の力を抜いて足を広げ、顎を上げてラッコのように水面に浮く。水難事故から身を守る泳法を教える出前講座を県内の小中高校や自治会などで実施。2013年6月の設立以降、これまで延べ1万4600人に技術を伝えてきた。

宜野湾市消防に勤務する仲村翔代表が発起人となって活動をスタートさせた。きっかけは2011年11月に自宅近くの浦添市牧港川で、娘の友人である当時1年生の男児が川に転落した事故だった。救急車のサイレンの音に気付いて仲村さんも現場に駆け付け、男児が引き揚げられる現場を目の当たりにした。

仲村さんは「県内の水難事故死者数は交通事故死者数より多い」と指摘する。東日本大震災などで助かった事例がある衣服を着たまま浮く「着衣泳」に着目し、子どもたちが自ら命を守れるよう有志を募って無償で指導に乗り出した。

学校現場で普及させるため、教諭を対象にした研修制度の導入も県教育委員会に求めている。「全ては水難事故をゼロにするため。自助力を高めて安全に海を楽しんでほしい」と願う。

（中部報道部・砂川孫優）

住民総出の行事企画

船浮音祭りの会場で来場者と笑顔で話す実行委員会の池田卓委員長＝4月20日、竹富町西表島船浮（提供）

船浮音祭り実行委員会（池田卓委員長）＝竹富町

人口約40人で「陸の孤島」と呼ばれる竹富町西表島船浮集落。船浮出身のシンガー・ソングライターの池田卓さん(45)が2007年に企画・プロデュースして始めた音祭りは今年4月で15回目を迎えた。

船浮は陸路が整備されていないため船が唯一の交通手段で、隣の白浜集落まで10分ほどかかる。住民は常に過疎化の問題と向き合ってきた。

池田さんが「離島の離島と呼ばれる船浮に足を延ばしてもらい、多くの人に船浮を知ってもらいたい」「島の人たちに楽しみを届けたい」と考えたのがきっかけだ。

事前の会場設営から祭り当日まで、住民総出の大イベント。オリジナルグッズや地元食材を使った名物のイノシシ汁を販売し、集落は大盛況になる。

初回は約300人だったが、リピーターも増え、日本全国から毎年約600人が駆け付ける。収益は来年の準備資金以外、船浮公民館などに寄付している。

池田さんは何より、祭りがメディアに取り上げられることで「船浮に住みたいと思える人が出てきたらいい」と願う。「船浮の50年、100年後のために続けていきたい」という音祭りが、地域の思いをつないでいく。

（八重山支局・矢野悠希）

女性の生活支援に力

スタンプカードを活用して女性と行政をつなげようと支援活動に取り組む、女性を元気にする会のゴージャス理枝代表＝15日、那覇市・女性支援施設ソラーナ

女性を元気にする会（ゴージャス理枝代表）＝那覇市

那覇市でエステサロンを経営するゴージャス理枝さん(53)は、2015年に「女性を元気にする会」を立ち上げ、食料支援や美容を通じた生活支援を行っている。

設立当初から取り組んでいるのが「トータルビューティーフェア」だ。現在は、来場時に個人調査票を兼ねたスタンプカードを配布。会場に設置された行政のブースへ話を聞きに行くとスタンプがたまり、無料で美容施術が受けられる仕組みだ。

約半数だった来場者と行政のつながりが、昨年はスタンプカードを活用したことで99%になった。「きれいになったお母さんたちは自然と生活の相談もしてくれる。気分が変われば行動も変わる」と話す。

22日には那覇市で女性支援施設「ソラーナ」を開業する。規則や条件に当てはまらず施設に入れなかった女性を幅広く受け入れ、3～6カ月をめどに自立を目指す。

ゴージャスさんを突き動かすのは、これまで出会ってきた女性たちの存在だ。

「助けを求める声が毎日届く一方で、自立した女性たちも大勢見てきた。私が行動することでたくさんの人が救われるんです。人生の新たな道を開くきっかけになりたい」と胸を張った。

（社会部・末吉未空）

無断での転載、改変、複製、頒布を禁止します